

○ご利用者様に入浴サービスを提供する際に重要なこと

前述の『入浴の効果と身体に与える影響』から、入浴には良い効果もある反面、安全な入浴を行わなければ大変危険のあることが分かります。以下に、ご利用者様に入浴サービスを提供する場合に重要なことを挙げます。

①居室の温度管理

冬場の冷えた部屋は血圧を上昇させ、さらに浴槽の熱いお湯が一段と血圧を上げるため、心臓に大きな負担がかかります。狭心症や心筋梗塞の発作は、ちょっとした血圧の変動などが引き金となって起こりますので、入浴に際しては細やかな配慮が必要です

急激な血圧変動を避けるためには、**入浴を行う居室と湯温の温度差がないように、居室の温度管理が重要**です。



②的確な見守り

訪問入浴介護サービスにおいては、入浴前の血圧や体温等のバイタルチェックで、ご利用者様の健康状態を把握し、入浴の可否判断をした上で、適正な湯温・入浴時間・入浴方法の設定や入浴前後の水分補給等を行うことが重要です。

また、いくら身体への負担が少ない入浴方法であっても、重度の方の場合は特に負担がかかりますので、入浴中・入浴後も体調の確認が重要であり、気分が悪くなった時は浴槽から出て休んでいただくことが必要になってきます。

加えて、高血圧気味のご利用者の場合、狭心症や心筋梗塞は、少しの血圧の変動等が引き金となって起こり得ますので、より注意が必要です。

病気によって、症状の進行は異なります。末期がんの方は、亡くなる1~2カ月前になると、活力や機能が大幅に低下します。ターミナル期は、うとうとと寝ていることが多くなったり、呼吸が弱くなったりと、見た目にも衰弱していき、死が間近であることが明らかになります(詳細は P4 参照)。

的確な情報を基に、主治医や訪問看護、関連サービスとの連携に努め、ご利用者や家族の身体的、心理的側面に配慮した入浴支援の実施が求められます。

③適正な湯温の設定

42℃以上の熱いお湯は、一時的に血圧を上昇させるほか、血液の凝固により心筋梗塞を起こしやすくします。高温浴(42℃以上)は、眠気覚ましには効果的ですが、高齢者や要介護者にとっては身体への負担が大きく、事故に繋がりがやすいと言えます。

ご利用者様の健康状態に合わせた、適正な湯温の設定をすることが重要です。